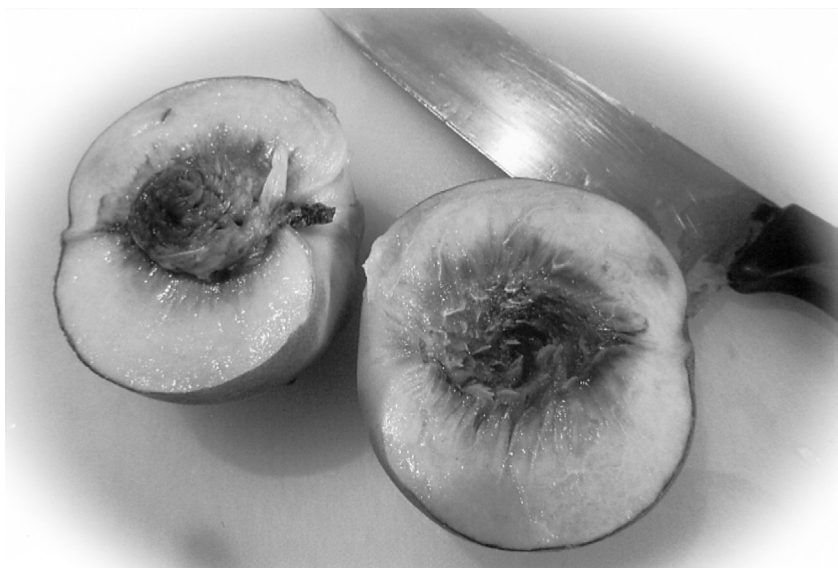


歌の周辺

桃の実のみずみずしくて、生命力の象徴みたいな果物である。古事記にある有名な話だが、伊邪那岐命が黄泉の国から逃げ帰るとき、黄泉の国の悪霊たちが次々と追いかけて来たので、最後は黄泉比良坂に在った桃の実を三個投げつけたら悪霊たちもやつと退散した。そこで伊邪那岐は桃に向かって「世の中で苦しんでいる人がいたら助けてあげなさい」と言った、という。

ある日、病人を見舞ったら部屋の中に桃をむいたあとのナイフが濡れて光っていた。その景を思い出して詠んだ歌である。病人が誰であったか、今思い出せない。

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・15

桃の実をひらきて濡れししろがねのナイフありけり病む者の辺に

——『汽水の光』

【鑑賞】桃は高野作品に馴染み深い素材であるが、この歌の桃は切りひらかれて、実の形をとどめない。「ひらきて濡れし」という言葉から、果汁滴る桃の果肉が目の前に現れ、その生々しさが人間の肉を想起させるのは、「ナイフ」「病む者」の言葉に因るのだろう。生と死の狭間にある命を思う時、怖さとエロスを感じさせる一首である。(松尾祥子)



佐賀県伊万里市 伊万里湾カブトガニの館で飼育されている雌と雄のカブトガニ

ふるさとコレクション——186

カブトガニ（佐賀県伊万里市）

カブトガニは剣尾綱カブトガニ目カブトガニ科の節足動物である。甲殻類ではなく、分類学上はカニよりもクモに近い。背面は甲羅に覆われ、剣状の長い尾を持つ。約2億年前の中生代ジュラ紀からはほとんど形態が変化しておらず、「生きた化石」と呼ばれている。

日本のカブトガニは、かつて瀬戸内海や九州北岸に広く分布、生息していたが、近年の海岸埋め立てや海水汚染などでその数は著しく減少した。玄界灘に面した伊万里湾は江戸時代から伊万里焼の積み出しで広く知られていたが、現在はカブトガニの生息、繁殖の海として注目されるようになった。

湾の東側、多々良浜（たたらはま）では夏場の大潮のとき、目の前でカブトガニの産卵を観察することができる。この貴重な生きものを守るため、地元の小・中学校、高校の児童・生徒や環境ボランティアの人らが産卵場所の清掃活動を行なっている。また、平成21年（2009）には、多々良浜近くに「伊万里湾カブトガニの館」を設けて、年間を通してその生態観察ができるようにした。

これらの活動経緯が認められ、カブトガニの繁殖、生息地としての環境が良好に保たれていることが評価され、平成27年（2015）、「伊万里湾カブトガニ繁殖地」として国の天然記念物に指定された。

（写真提供・伊万里湾カブトガニの館 解説・小嶋 一郎）